

障害者の作業復帰の段階に至る研究

TANAKA, Akira / ANDO, Nobuyoshi / 田中, 明 / 安藤, 信義

(出版者 / Publisher)

法政大学体育研究センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The research of physical education and sports, Hosei University / 法政大学体育研究センター紀要

(巻 / Volume)

4

(開始ページ / Start Page)

12

(終了ページ / End Page)

17

(発行年 / Year)

1986-03-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00005037>

障害者の作業復帰の段階に至る研究

田中 明 安藤 信義

(キーワード) 障害者, 作業能力

目 的

本研究は、精神障害者とくに慢性期分裂病者を被験者として、その作業の適応性を同一症例の経年経過について追究をおこなっている。

慢性期の分裂病は、その症状が潜在しており、あまり表面に目立つことがなく一見して正常とあまり著変がないように見られるが、身体疾患と同様にその身体諸機能の低下はいちじるしいものがある。この分裂病には、症状によりその病層期が急性期、増悪期、慢性期、寛解期等にわけられるが、経過によっては欠陥症状をのこしている場合もある。またこの疾病は多くの精神症状を出すのも特徴で急性期や増悪期では特有の異常体験があり、あらゆる行動に強く作用するので、一般的な作業や行動はできない。これには特定の幻覚とか妄想などが強く作用していることによる。したがって、対象者としては、急性期および増悪期の分裂病者は除外した。

本研究の目的は「精神障害者に対する作業復帰」としてあるので、研究の対象者は慢性期の分裂者でいかなる社会復帰がなされるかに重点をおいた。この慢性期の分裂者は対人関係に疎通を欠きまた症状の潜在や、不顕化があり表面的には一応安定化されているが、不確実な浮働の要素も多くふくんでいる。またこのような慢性期の分裂病は高度な精神活動が粗外されていると研究がなされており、その発生学的な関連からすると、高度に進化した大脳前頭葉に関与してしていると考えられるので、他の動物との比較は全く不可能であるというような唯一性も考慮しなければならない問題もある。このような症状の潜在化と身体的に低下した機能をいかに向上させるか。また、彼等に適応する作業の有無について研究をおこなっている。

研究方法

作業内容は、1) まず危険性がないこと、2) カウンター化できるもの、3) 一般的なもので被験者にプレッシャーのかからないもの、4) あまり疲労のともなわないもの、などの業種を選ばなければならない。よってこれらを考慮した結果、「のし」折り作業と、「折り鶴」作業を選び「オ

障害者の作業復帰の段階に至る研究

リガミテスト」として、カウンター化してこのテストを実施した。いちがいに祝儀袋といってもこれには不祝儀をふくむ約 3000 種類の型態のものがあり、規格統一市販されている。この多種類の中から現在一番多く使用されている祝儀用 35 号規格のものを選んで研究をおこなった。この 35 号規格の祝儀袋の完成品は外装（縦 18.5 cm 横 10.5 cm）と内装の 2 つの袋があり、これらはすべて機械によって折りたたまれているが、手作業の部分になるところは、祝儀袋の右上端にある斗、長さ 8 cm、上巾 2 cm、下巾 1 cm の「ノシ」を組立て、外袋に接着し、水引を結んで完成するが、このうち「ノシ」折りのみを抽出して作業を行った。「ノシ」折り作業は、これのみを完成させるのに 7 工程があり、この「ノシ」に黄色のしんを入れて、完成させるのであるが、完成品が祝儀用であるので、紙の不ぞろい、はみ出し、左右差の有無、芯の片寄りなどあまり美観をそこなうものについては選別をした。この「ノシ」折り作業は、祝儀袋の生産地に限られるとゆうようなローカルの面と、器具として金型、特種なピンセット、接着材の使用などの特種性があるため、これらを考慮して一般によく知られている折り鶴作業をこれに加えて実施した。この作業は完成まで 20 工程にわけられる。折り紙の大きさは、東洋紙工（1015）規格 150 mm 角、（1012）規格 117 mm 角の 2 種からコントロール群以下 C 群、実験群、以下 E 群、ともに予備実験で出来高が最も多く、折り込みやすく、しかも不良品の少い、（1012）規格 117 mm 角でテストを行い、完成品については、左右差の有無等の外観について選別した。

これらのテスト施行については、この生産工程に時間制約を加え完成品（+）、未完成品（-）として計量をした。時間制約については、内田クレペリン精神作業検査を準用し、作業を前半 15 分、後半 15 分、中間に休息を 5 分間とり、また製品のうち不良品、未完成品については全作業終了後これを選別した。また E 群に筋肉作業と知的能力との関連性について追求するため、東大能研式知能検査とタッピングテストを施行した。タッピングテストの測定法については、計量しやすくするために 15 分を 3 分ずつに区切り、一区切りで数を記録し 5 回これを続けた。なおこれも「ノシ」折り作業に準じておこなったものである。

結 果

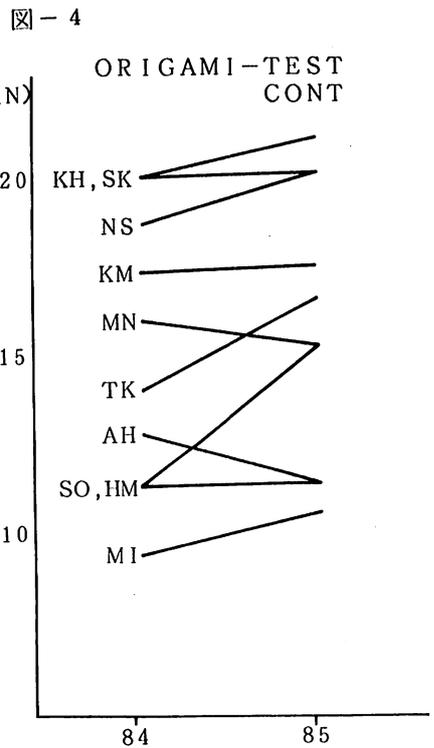
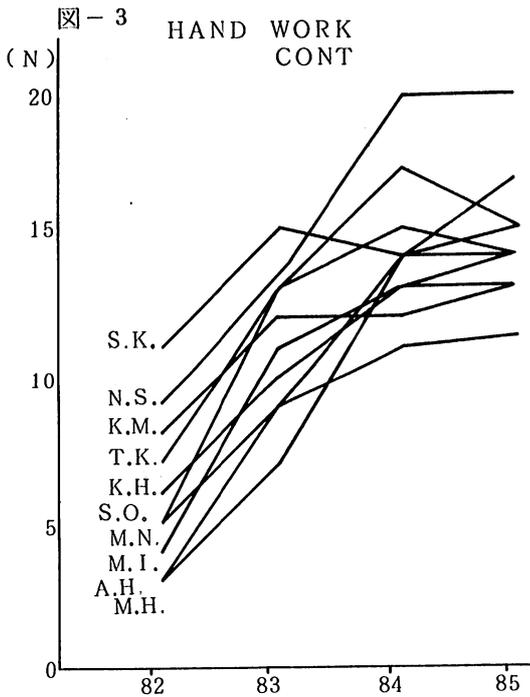
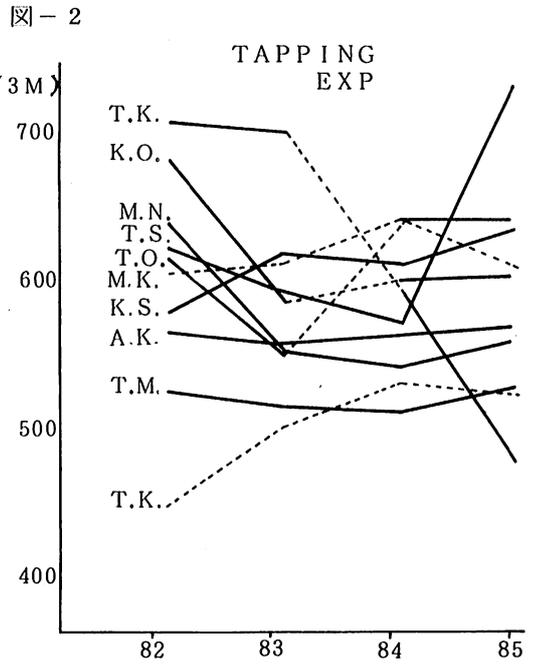
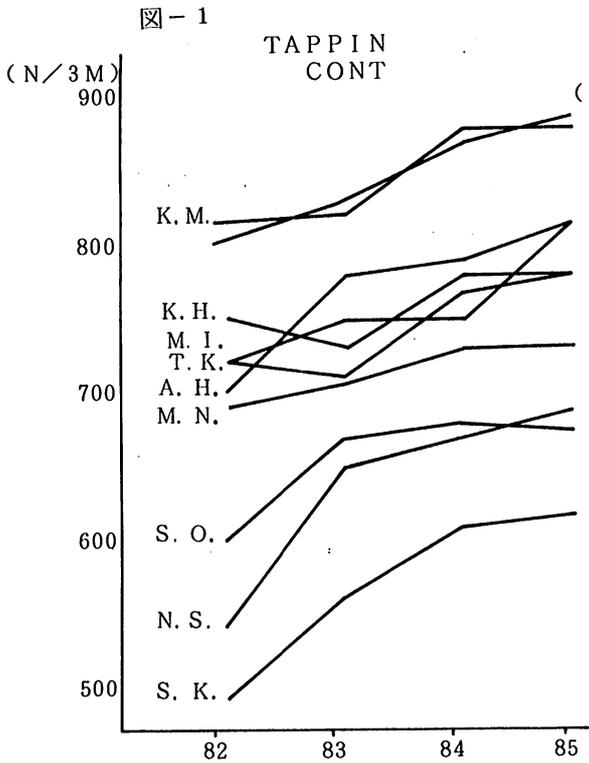
E 群は、精神分裂病で入院または不完全寛解状態で通院中の者、男子 35 名、女子 21 名、合計 56 名、年齢は 15 才から 59 才、症病経過年数は 1 年から 31 年。

C 群は、男子 13 名、女子 10 名、合計 23 名、年齢 18 才から 24 才の者を選び対象者とした。

図-1 は、C 群タッピングテストの経年経過である。83 年、84 年までの上昇に比べ 85 年は平行の状態となっている。

図-2 は、E 群のタッピングテストの経年経過である。実際は入院加療中の者であり、83 年までは低下がみられるが、以後目立った向上は見られない。また点線は、不完全寛解状態で通院中

法政大学体育研究センター紀要



障害者の作業復帰の段階に至る研究

図-5

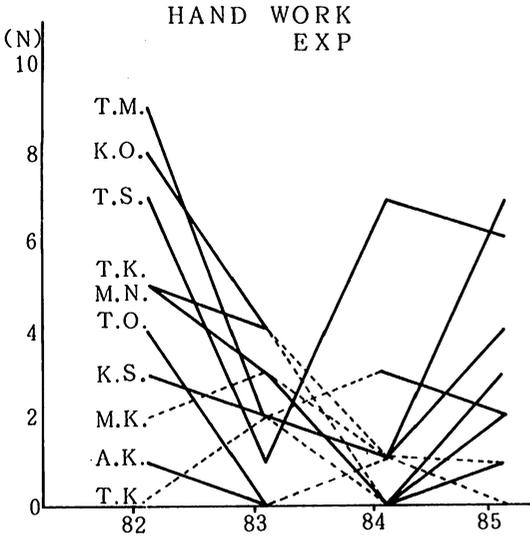
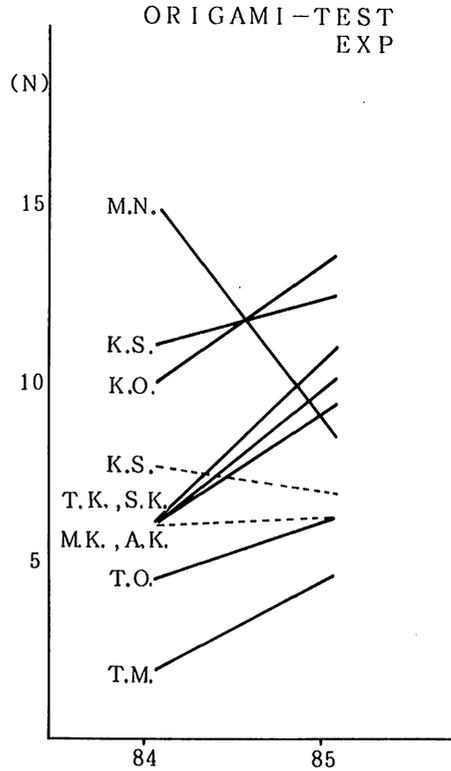


図-6



の者であり、84年までの向上から85年はやや低下の傾向がみられるのは、3年の経過において機能の低下、病状の悪化を示しているものと推測される。

図-3は、C群「ノシ」折りテストの経年経過である。84年までは練習効果があるものの、85年ではこのクラスの向上は、限界に来たものと推察される。

図-4は、C群折鶴テストの経過である。「ノシ」折り作業の経過と同様にやや上向しているのが見られる。

図-5は、E群「ノシ」折りテストの経年経過である。実線は入院加療中の者で、82年から84年まで作業は低下しているが、85年は作業能率の向上がみられる。点線は、不完全寛解状態で通院中の者であり、85年まで全体的に低下の傾向にあるが、84年に入院実線となった者は1年の経過において作業の向上がみられる。

図-6は、E群折鶴テストの経過である。このテストも「ノシ」折り作業と同様に入院加療中の者の作業の向上がみられる。

考 察

タッピング、「オリガミーテスト」の3年までの経年経過にみられる不完全寛解状態で通院加療中の者は作業能率の向上がみられるが、これは退院して家庭生活に復帰したこと、それにとまない精神活動も向上したことにもよるが、この傾向は比較的発病年数の若い者にその傾向が著名であった。また能率の低下をしている者は欠陥症状で入院加療中であり、症状の悪化から作業の不適を一層強くしている。

さらにこれを4年の経年経過からみると、不完全寛解状態で通院加療中の者の低下は、退院当所は今までの作業経過の連続であり、向上がみられるのは当然のことと考えられるが、4年経過した現在「オリガミーテスト」の結果からすると、衰退傾向をみているのは一般日常生活や労働作業に追はれて「オリガミーテスト」をしていなかったためと推考される。入院加療中の者の上昇傾向については、これらの人たちが「オリガミーテスト」に従事している結果と考えられる。これは毎日の練習効果のあらわれであり、単純作業のため確実に作製するという、この疾病患者特有の病的な性格を考慮しなければならないが、これが良好な状態にあるときは結果も良いはずである。

折鶴テストの経過については、工程数や作業のちがいはあるものの、ほとんどは「ノシ」折りテストと同じ経過を示しており、「ノシ」折りテストを中止しても、経年経過は同様の結果が得られるものと推考された。4年の経年経過を全体からみると、一見安定化されているようにも見られるが、不確実な要素も多く含まれており、これは精神分裂病の特徴である不安定要素が介在しているものと推考されるが、これらは精神分裂病の数多くの研究にもあるように結論的には作業能率の低下をみており、本研究でも顕著にこれがあらわれている。

今回得られた特徴及び傾向は、「オリガミーテスト」や、タッピングテストの経年経過にみられるように欠陥症状で入院加療者は作業能率の向上をみており、不完全寛解状態で通院中の者は4年の経過において機能の低下をきたしていることが認められた。このような結果は、分裂病の特長の一つと証明する手がかりを得たと考えられる。したがって精神障害者、特に精神分裂病者が適応する手作業としては、知能の高低にかかわらず対応性が悪いために、ノルマをかけさせる仕事は不可能であり、時間制限で行う作業や、長時間長期にわたる作業及び強制的な指示は彼等に良い作業方法でない。これらのことから病者特有の作業を配慮しなければならないという結果を得ることができた。

障害者の作業復帰の段階に至る研究

参 考 文 献

- | | | |
|--------------------|--------|-------------------|
| 運動の生理学 | 小野 三嗣 | 朝倉書店 |
| 精神薄弱者の職業適性 | 狩野 広之 | 労働科学研究所 |
| 分裂病の現象学 | 木村 敏 | 弘文堂 |
| 精神医学 | 安藤 信義 | サンポーブックス |
| 臨床精神医学 | 笠松 章 | 中外医学社 |
| 目でみる脳 | 時実 利彦 | 東京大学出版会 |
| 目でみるリハビリテーション医学 | 上田 敏 | 〃 |
| 産業疲労 | 吉竹 博 | 労働科学研究所 |
| 折り紙の幾可学 | 伏見 康治外 | 日本評論社 |
| 精神障害者の体力と手作業に関する研究 | 田中 明 | 法政大学体育研究センター紀要第3号 |